

SOHOの若い熱気が生み出す、 「スラムの惑星」展の秀逸

New York

ニューヨーク

藤森愛実=文

Text by Manami Fujimori

「スラムの惑星」展

Planet of Slums

2010年12月17日～2月5日

サード・ストリーミング

Third Streaming

*10 Greene St., 2nd Fl., New York

Tel. +1-646-370-3877

12:00～18:00(土13:00～)

日月火休

本展は、在野のキュレーターとして定評のあるオマール・ロベス=シャウト、ホイトニーのインデペンダント・プログラム在籍のアーティスト、ラトヤルビー・フレイジャーの共同企画。マイク・デイヴィスの同名の著作『スラムの惑星』(2006)に想を得た展覧会だが、「スラム化する都市の貧困」といった重々しいテーマを扱ったものというよりは、都市の再開発や商業化によって生じたひずみや置き去りにされたものに注意を向けた写真や映像、絵画など、13人の若手作家の作品が紹介されている。

都会の荒涼とした風景を、建設途上のビルや冬枯れの樹木をモチーフに描くエリック・ベンソン。その絵画は、鉄線や壁面など、絵具のコラージュ(?)とでもいえるようなほど表面が盛り上がり、独特のリアリティーを見せている。また、ニューオ

リンズやニューヨーク州北部など、町中の過疎に注目し、廃屋の表面全体をラテックスで丹念に型取りする堀崎剛志。扉の番地や木目、ペンキの剥け加減までそのままの、いわば建物のスキンが、一枚一枚、洗濯ヒモに吊るされている。そのユーモラスな詩情から、家の歴史や人の記憶が浮かび上がってくるようだ。

会場のサード・ストリーミングは、昨夏、SOHOのロフトビルにオープン。思えば、SOHOもまた商業化の餌食となり、最初は作家スタジオが、やがてはギャラリーが立ち退きを余儀なくされたが、いままた不況の鄙りで空き店舗が目立っている。そんな都市のリサイクルの狭間で活躍するギャラリストやキュレーター、アーティストの心意気が、本展の力強さであり魅力。オープニングの夜は、まさに80年代の画廊シーンの賑わいだった。



上——エリック・ベンソン 更地 2010

下左——会場風景から、堀崎剛志の《洗濯日和I》(2010)の展示

下右——バドリック・ハミルトン サンチアゴの扮飾建築(フォトコラージュ #15) 2010

All Photographs: Courtesy of the artists and Third Streaming, LLC.